はじめに
´
″
）
暗いうちから起き出して廊下の窓から外をみれば,それでも大気は少しずつ柔らかに変容してゆく。
電信柱の水銀灯も,や―がて家々の窓にともる灯へと移ってゆく。人が起き出し,人が動き始める。生活を
はじめる。 |
窓硝子は曇り水滴をもつ。シュンシュンと水が沸き湯気に曇るからだ。こうして家の空気は暖かくr.‐ る。
(起き出した髪の長い女の子は,おかあさんのひざにとん J堅る。おかあさん|ま白い米飴を女の子にほお
ばらせ,手にうすく椿油をのばしながら髪をすく。三つあみにするためだ。今年の冬はいっそう椿があかく
咲く。)(イメージは昔ばかりに固執する。).
あの家に住む人は何を思う人だろう。どん/A‐ 顔をしているだろう。手を握ったら暖かいだろうか。戸をた
たいてその生活を少しみたい気もする。
20年の生活は相当にその人をつくっている。 4年あまりの新しい生活で人はなかなかに変わらない。裏山
の暖かい大きな石に固執する人もいる。伐採場の木の香りと冷飯の味に固執する人もいる。夕ぐれのチンチ
ン電車あれが僕だという人もいる。それらをr.‐ っかしい
`と
―いい,そこに「 帰る」という人もいる。この4年
間の事柄はやがてなつかしい場所を提供するだろうか。いやなか/A‐ かに殺伐としたものでしたという人もい
るかもしれない。
去られる人達。何をわたしたちのなかに残し,何が各人のなかに披露されることなくしまわれ,そのまま
に持ち去っていかれるのだろう。
新しく来る人たち。すでにその人格は相当に固まっているのだろうか。たたけば開けうるか。
こがね色の朝日が差すころザワザワと本格的に朝ははじま,る。わたしたちにはもつと語ることがあるはず
だ。希望とか未来とか。そしていつか肩組み「 ラァラア」とうたいたいものだ。
(N)
υ

総合科学部待望の第一期生がいよいよ卒業するこ
とにならた。大学院進学の諸君をのぞいて進路もあ
らかた決定し,この不況の時期としては相当な成績
という。平和な時代にむけての諸君の門出を心から
祝福したい。
卒業生の進路は教職員にとっても大きな関心事だ
った。学部創設の成否をはかる一つの物差しと考え
られたからである。本人の努力はもとよりだが,教
職員,とくに就職委員会の尽力に対して,心からの
敬意を表さr.‐ くてはr■‐らない。
第一期生としての諸君にとっては,学生生活その
ものが困難やとまどいを伴ないがちであったに違い
ない。教職員のあいだでさえ,出発時には,具体的
な面でどれほど共通理解があったか不確かな実情で
は,それも止むを得なかつたであろう。カリキュラ
ムの修正が毎年行なわれた。教官陣容の整備も,平
均して一年以上学年進行におくれていた。施設にし
ても同様である。
万事不如意であった。教職員にしろ学生諸君にし
ろ,ひとひとそれぞれの仕方で不如意を感じていた
ことと思う。だがそれだけに,困難を打開しようと
する熱気が,学部内に帳つていたのを私は感じるので
ある。環境科学コースの学生が,内容充実を求めて
要望書をまとめたのも,そうした熱意の表れであろ
う。
そうした創設期の不如意や不安定さを乗り越えて,
諸君が卒業と呼ぶにふさわしい力を身につけてくれ
たことは,事に当たる者としてこれほど嬉しいこと
はない。成熟期よりむしろ揺鑑期にこそ人物が輩出
するという。私もそれを信じそれに期待したい。
もちろん総合科学部の評価がこれからのわれわれ
の努力に待つように,諸君にとっても,卒業は一つ
の出発点にすぎず,すべてはこれからだといって過
言ではない。人間としての修業は,まさにこれから
始まるのだといつていい。そして実際 ,諸君が学ぼ
うとする姿勢をもつかぎり,実生活は,正負両方向
において豊富きわまりない教育材料を提供してくれ
るものである。
正負両方向といったが,むしろ重点はプラスの方
一期生の卒業を前に
向におきたい。とかく批判はたやすいが実行はむつ
かしいものである。もし身辺に,学ぶに値する人間
を見つけた7A‐ らば ,徹底的にその人物から学び ,人
間としての幅をつけるように心懸けたい。魅力のあ
る人間がいないというのは,あるいは見る目,感じ
る心をもたf■‐いということかもしれない。
積極性がほしいのは仕事についても同様である。
できることかできないことか,それが定かでないと
きは ,むしろできる方に賭けたい。そう信じること
によって ,そうした努力を重ねることによって ,危
ぶまれたことが実現できる場合も多いからである。
人間の世は,自然の世界とちがって ,当事者の心の
むけかたに懸る面を多分にもっている。諸君よりい
くらか長く生きた私の実感である。
といって私はこれらのことを ,私がそう生きたこ
ととして諸君に語っているのではない。むしろ,そ
うありたいと願ってきたこと,いまも自分にそう願
っていることとして語っているのである。私の現実
はこうした願いを絶えず裏切ってきた。だが ,それ
でいて ,こうした願いをもつことは ,実際の行動に
何程かの影響を及ぼさないではない,とも思うので
ある。
わが道を往く。それでよい。だが,前を向いて歩
こう。そして数年後には ,また一段と力を増した諸
君と,再会を喜びたい。
里妬計り (hOIne COming)とぃうの刈まいいこと
ばである。五年 ,十年といった節目ごとに,そうい
う機会を作って ,互いに新しい経験を語り合い ,友
情を確かめ合うようにしたいものである。日本の大
学では必ずしもそうした慣習が確立していないよう
だが ,諸君の代からそれを始めてもよいかもしれr■‐
い。
諸君を送り出した総合科学部の方も,その頃まで
には,名実ともに第一級の研究教育機関として,内
外に認められるものになつていることであろう。
式部久
-2-